

読売新聞東京本社

活躍の場を拡げるカラーマネジメント液晶モニター ColorEdge

株式会社ナナオ
www.eizo.co.jp



読売新聞東京本社
〒100-8055
東京都千代田区大手町1-7-1
TEL:03-3217-8189



●読売新聞東京本社社屋、箱根駅伝ではお馴染み

前は文化財のアーカイブ現場を見てきたが、今回は新聞社でカラーマネジメントモニターが使われている現場、読売新聞東京本社を紹介したい。CG21が同社の組版部門で導入され、(株)ナナオのウェブサイトで紹介されたこともあるようだが、本稿ではカラーマネジメントの本丸でもある画像センターや写真部での本格的な使われ方に迫ってみた。

新聞印刷だからこそハードウェア キャリブレーションCMSモニター

初めに断っておくが、読売新聞社全体で何台のEIZOのカラーマネジメントモニターColorEdgeが使われているか？という点、東京管轄だけでもその数200台以上、大阪管轄では150台以上、東西だけでも450台以上を数えるわけで、CG21、CG210、CG211そしてCG241Wが用途に応じて、その要求度に応じて使い分けられている。最もシビアな品質が要求されるソフトブルーフやスキャナー部門にはCG241Wが、画像レタッチや広告チェックにはCG211もしくはCG210が、そしてCG21という具合に最新機種が画像処理部門に優先的に配備されている。何せ半端ではない台数なので性能的に多少の妥協はやむを得ないのだが、絶対に妥協していないのは全機種ハードウェアキャリ

ブレーションモニターであることだ。今や新聞もカラー写真が中心になっているが、白黒写真は調子再現こそが命であり、トーン再現がおかしくなるとは元も子もないからである。ましてや新聞印刷はドットゲインが大きく、普通のオフセット印刷に比較してモニターキャリブレーションで極端な補正が必要になってくる。確かに新聞印刷なのでsRGBモニター中心で配備はされているが、新聞印刷だからこそハードウェアキャリブレーションCMSモニターなのである。今回案内役をお願いしたのは制作局技術一部の松本賢一氏だ。技術部とは、実際の現場が支障なく作業できるようにシステムの構築、機材の選定、管理、教育まで幅広く面倒を見るシスアド(システムアドミニストレーター)のような役目の部署である。そして大事なこと、新聞社は24時間体制の不夜城だ。

18時～明朝2時、9時～17時、14時～22時の3交代制勤務が基本となっている。お相手していただいたのはいちばん時間の取りやすい14時～16時(夕刊から朝刊の狭間)ということになる。こんなところも新聞社訪問の常識なのだ。

日本新聞協会の標準カラーにも対応

紹介するメインの部署は画像センターだ。いわゆる画像修整(レタッチ)を行うのが主たる役目だが、新聞ならではの約束ごとも多い。総インキ量が通常のオフセット印刷だと350%のところ、新聞印刷では220%～250%程度しかインキが転移しないので、UCR(GCR)^{*1}などのノウハウを最大限に使用してキレイに印刷する必要がある。読売新聞の場合は120線のスクリーン線数、スクエアドット^{*2}を使用し240%を基準にしている。画像のハンドリングは1,200dpiを基準にしているが、特筆すべきはAdobe RGB画像でレタッチ作業をこなしていることだ。ワンソースマルチユースを考えれば、RGBのほうがワークフロー的にメリットが高い。たとえば写真集などにニュースコンテンツが使われる可能性が高いので、Adobe RGBを採用しているのだ。オペレーションに関してはマスク作成を考慮して画像センターではペンタプレットを標準採用している。モニターキャリブレーションは月1回il Pro^{*3}で決まったマニュアルに沿って行い、完璧に調整する。読売新聞の場合標準カラーを社内ではG2-2Cと呼んでいるそうだが、基本プロファイルはG2-2C



●白黒こそ調子再現が命
●スキャナーにはCG241Wが接続
●画像センター風景
●昔も今も新聞はマスクが基本
●世界時計が新聞社らしい写真部
●写真部の片隅では常に撮影できるように
●校正刷りはインクジェットに完全移行
●広告局に置かれたソフトブルーフ、もちろんCG241W

を使用し、Japan Color for Newspapersにも日本新聞協会のNSAC(Nihon Shimbun Ad Color)^{*4}にも対応できるようにしている。これもRGB運用のたまものであろうが、広告関係ではNSACの割合が増えているらしい。カラーマネジメントの具体的な方法としては、紙白として純白と新聞紙の2種類を常に選択できるようにしているとのことである。通常画像レタッチは純白基準に行い、出来上がったから印刷時の確認をするというフローなので、この先電子メディアに新聞記事が載ってもこれなら戸惑うこともないだろう。

同様に写真部は、銀塩フィルムに代わってデジタルカメラを使用しているのだからすんなりRGBモニター中心のワークフローに移行している。「普段の仕事=カラーマネジメントモニターで確認すること」なので、その重要度などは十分理解されている。レイアウトをしている編成局も、通常のDTPでは当たり前になったモニターを眺めながらの作業が完全に板についている。もちろん校正確認(ゲラ)もインクジェットプリンターだ。画像センターや写真部くらいに色が重要な広告局もカラーマネジメントモニターが大活

躍で、新聞用紙に完全チューニングされたソフトブルーフ(CG241W)が大活躍している。同じソフトブルーフは印刷局側でも確認できるようになっており、威力を発揮している。もちろんインクジェットのブルーフも活躍しているが、通常印刷よりも時間に追いつかれる新聞ではインクジェットブルーフと併せて品質管理を支える最重要ツールになっていることは間違いがない。これからはインクジェットブルーフを取る時間さえなくなるかもしれないのだ。(文責:郡司秀明)



●向かって右が技術一部山岸雅広次長、左が松本賢一氏



●編集局画像センターの佐々木勲次長。手に持っているのはキャリブレーションデータチェックシート
●わかりやすいキャリブレーションマニュアルを作成することこそ品質管理の要



●印刷現場のソフトブルーフ、モニターはCG241W
●CTP
●東京機械製の印刷機

*1 UCR(GCR): Under Color Removal(=下色除去)は、CMYKで構成される黒の部分からCMY成分を除去し、使用インキの量を減らすこと。Gray-Component Replacement(=グレー置換)は、同様にCMY3色で構成されるグレー成分をSM1色に置き換えること。
*2 スクエアドット: 形状が正方形(スクエア)の網点。
*3 il Pro: エックスライト社製の分光光度計。
*4 NSAC(Nihon Shimbun Ad Color): 新聞輪転機で印刷可能な色再現域を数値化した色見本。カラー広告に対応するため、Japan Color for Newspapersよりも色再現域が広い。